

〈研究論文〉

1930 - 40 年代旧日本軍太原臨時衛生調査班とその活動*

孫 登洲**
祁 建民***

要 約

新史料、新根拠、新発見によって、旧日本軍太原臨時衛生調査班及びその活動の史実が浮上し、学界の注目の的となりつつある。戦争の最中に臨時編成された当調査班は、三年近くにわたって中国山西省太原市及び其の付近地域に対して数多くの衛生学的調査や研究を実施した。太原臨時衛生調査班に関する史料の新たな発掘につれて、それらに対する解説や研究は日中戦争期の山西省地方の衛生学的実態を明らかにするのに役立つであろう。と同時に、当時の戦争史的研究のために内陸部黄土高原乾燥地帯の調査ケーススタディ及び「衛生調査研究」という新たな視点や側面を提供してくれた。さらに日中戦争史の研究分野や対象も多様化、豊富化させることができ、当時山西省地方社会の側面や実態に対する研究を深めることができよう。

キーワード：衛生調査；山西太原；調査活動；対策参考

はじめに

近代以降、日本側の官、軍、民、学などの調査機関によって長時間にわたって対中調査が実施されてきた¹。それらの活動を通じて内容豊かな数多くの調査報告が残された。戦争期日本側の対中調査については学者たちに注目されており、ここ数年来、中国における档案資料の整理や出版及び関連文献資料データベース²の利用も可能になり、関連研究の深化を後押ししてきた。現在のところ、日本側の対中調査について

の研究では、「満鉄」調査部、東亜院同文書院、興亜院、日本軍部及び政府、特務機関などを対象にしたものが多く、内容としては主に政治、経済、軍事、地理、文化、社会状況、人々の生活水準などについて議論されたものがメインである。しかし、関連資料不足のせいか、学界では日中戦争期の日本軍占領下の地方衛生医療の研究は少なく、「衛生」という名目で対中調査についての研究もあまり見られないのが現状であろう。³

史料の新たな発掘と整理によって、更なる歴

*本稿は中国「山西省2024年度革命文物研究専門課題」（SXGMWW2024011）の助成を受けて実施した研究成果の一部である。

**中国山西大学外国語学院講師。

***長崎県立大学国際社会学部教授。

史研究の展開が可能になる。2022年9月3日には、「旧日本軍防疫部隊原始日本語調査報告」の新聞記事のため、太原臨時衛生調査班及びその活動が浮彫になり、社会や学界からも大きな関心が持たれてきた。⁴

戦争最中に編成された太原臨時衛生調査班は北支⁵方面軍第一軍の傘下入りであった。成立後、関連機関の支持や指導のもとで山西省太原及び周辺地方の住民の生活習性、生理特徴などについて何度も全面的な調査を実施して、北支方面軍第一軍軍医部に一連の調査報告を提出することになった。以下の通り、新たに発掘された日本語史料を利用し、日本国立公文館アジア歴史資料センター所蔵の史料を合わせて、太原臨時衛生調査班及びその活動について検討することにする。

I. 太原臨時衛生調査班の編成

盧溝橋事件が勃発した直後、日本軍が華北地方に勢力を伸ばしてきた。1937年9月9日に山西地方に侵入し、11月8日には省庁所在地太原市も陥落されて、北支方面軍直轄、第一軍配属の109師団に占領された。軍事作戦及び長期間占拠のため、太原陥落直後、作戦命令に基づいて太原臨時衛生調査班が編成されることになった。

当調査班の編成の経緯及びその目的としては、当時太原臨時衛生調査班要員の陸軍軍医中尉の村上賢三が1939年11月には、本人による「太原臨時衛生調査班業績集（山西地方二於ケル衛生対策参考資料）」の序文では詳しく紹介された。村上賢三は日本官立金沢医科大学助教授、教授そして偽満洲国哈爾賓医科大学教授を歴任し、衛生学の研究に従事している。関連史料によると、村上賢三は太原臨時衛生調査班成立当

初の加入者ではなく、約半年後の1938年6月に当班に入り、その調査や研究は1939年11月まで続いた。太原臨時衛生調査班調査研究のキーパーソンである村上賢三本人が組織し関与した関連調査や研究は16篇にも達し、そして何篇もの調査報告も提出された。⁶ 村上の序文の記載によると、「昭和十二年十二月十四日一軍甲命第二一八號ニ基キ昭和十二年十二月二十七日一〇九師作命丁第六十七號ニヨリ臨時ニ編成セラレタルモノニシテ」⁷ とする。太原臨時衛生調査班は第一軍をはじめ臨時編成されたもので、その成立時間は1937年12月27日であるというのが分かった。当調査班は第一軍の作戦命令のほか、109師団の命令もあった。そして、その初代の班長としては北支方面軍直属第109師団第四野戦病院院長大橋少佐が当たった。つまり、成立当初、太原臨時衛生調査班は109師団と深い関わりがあり、その業務展開は109師団からの影響も強いと言えよう。⁸

太原臨時衛生調査班及びその活動については、「太原臨時衛生調査班業績集（山西地方二於ケル衛生対策参考資料）」の中では回顧してまとめた。この「業績集」は第一軍軍医部の指示によって1939年11月15日に作成されたものであり、現在日本国立公文館アジア歴史資料センターに所蔵された。そして「秘」レベルの資料と取り扱いされて、当時の北支方面軍第一軍軍医部長木村の命令に従って第一軍作戦部隊である笠原部隊本部に一冊配付された。ただ注意してほしいのは、太原臨時衛生調査班の活動は1939年11月15日にとどまらず、その後また約1年間ぐらい続いたということである。

太原臨時衛生調査班は第一軍軍医部によって編成されたが、石家荘の特別疾患収容班と第三野戦防疫部太原分遣隊からも大きな支持が得られた。村上賢三陸軍軍医中尉は「業績集」の「序」

の中では次の通り当班のメンバーについても一応触れた。「編成當時、協力部隊トシテ石家莊ヨリ前進シ来リタル特別疾患収容班及ビ第三野戦防疫部太原分遣隊ト共ニ調査研究事項ヲ立案シ、業務ニ着手スルコトナリシガ」⁹とした。この内容から見ると、第一軍軍医部に属する太原臨時衛生調査班は石家莊の特別疾患収容班と第三野戦防疫部太原分遣隊とは業務関係や人員などでの連携関係があるが、協力関係に過ぎなく、お互いに隷属の関係を持たず、違う別々の存在であるということが分かる。¹⁰ 成立後、ただちに「業務ニ着手」し、そして1938年1月に当班のメンバーである陸軍薬剤中尉橋本紋兵衛によって「太原城内外部隊使用井水ノ水質検査成績」という題とする最初の調査報告が提出された。¹¹ 「元方面軍軍医部長山本閣下、松浦閣下ヲ始メ前一軍軍医部長三宅閣下及ビ元百九師団軍医部長葛西閣下、吉野大佐、前班長百九師団第四野戦病院長大橋少佐」が常に「業務遂行上適切ナル支持ヲ与ヘラレシ」¹²とあるように、当班の業務展開はまた北支方面軍軍医部と第一軍軍医部と109師団軍医部からも指導や指示も得られた。また、当班は第一軍に山西省内各地に派遣され、調査活動を実施した。¹³

当調査班員の構成としては、太原臨時衛生調査班の多くは第一軍軍医部と109師団軍医部の陸軍軍医であり、また、後に石家莊特別疾患収容班や第三野戦防疫部太原分遣隊及び山西省衛生調査要員、北支那防疫部太原支部のメンバーも加入した。肩書から見ると、陸軍軍医少尉、中尉、大尉、少佐そして中佐がおり、また、陸軍衛生部見習士官もいた。手元の資料によると、太原臨時衛生調査班班長としては二名いたということが分かった。初任班長は当時の北支方面軍直屬第109師団第四野戦病院院長大橋少佐が当たり、後になって第一軍軍医部中佐三宅惣八

郎に変わったのである。

当班の事務所としては、当時太原市内の山西川至医学専科学校の旧跡に選定された。その理由として、ここが当時閻錫山の指示によって成立された医学院であり、日本軍は参考に資する山西省関連医療衛生疾患などの研究資料が保存されており、研究室も硝子器材や薬品などの物質も備えているところであると考えられているのである。しかし、ここは日本軍による爆撃のためだいぶ破壊されており、「爆撃ヲ被リ著シク破壊セラレ荒廃ノ状惨怛タル上ニ研究資材ハ皆無ノ状態ナリキ」という羽目になった。太原臨時衛生調査班はここに移転してから「先ヅ多数ノ苦力ヲ指揮シ破壊箇所ノ修復ヲ計ルト共ニ太原市内ニ散逸シ在リシ参考書類、硝子器材、薬品等ノ蒐集ニ努メ研究室ノ充実ヲ計レリ」¹⁴と工夫したのである。以上は太原臨時衛生調査班成立当初の事情であった。

II. 太原臨時衛生調査班の再編と発展

戦争情勢の発展や調査班の業務展開の推進のため、組織自体でも調査班員構成でも大きな変化が見られた。「斯クシテ漸ク調査研究ノ緒ニ就カントセシ時、昭和十三年四月二日特別疾患収容班ハ石家莊ニ転進シ、第三野戦防疫部太原分遣隊モ亦屢々作戰ニ参加ノ為移動シテ遂ニ昭和十四年一月當班ト相分ルルニ至レリ」とし、そして「當班内部ニ於テモ作戰毎ニ将校、下士官、兵ノ異動頻回ニ行ハレ業務ノ遂行上支障ヲ来ス事屢々ナリシ」こともよくある。¹⁵ つまり、1938年4月2日に「特別疾患収容班」が石家莊に移転し、1939年1月になると、第三野戦防疫部太原分遣隊も離れるようになった。しばしば作戰参加のため移動しなければならないし、太原臨時衛生調査班班員の異動や変化は多く、こ

れらは当班の調査研究「業務ノ遂行」に支障を来したのである。ここで注意してほしいのは、当班メンバーの頻回なる異動があるが、当班と業務上完全な離脱ではなく、組織面の人員の調整なのである。一度離れた北支那防疫部太原支部の陸軍薬剤少佐大島英男は1940年1月にはまた太原臨時衛生調査班の「硬水軟化研究」に関与したのである。¹⁶

当調査班のメンバーの頻回の異動や調整の対策として、1938年11月25日に太原臨時衛生調査班は第一軍の指示に基づいて改編することになった。「昭和十三年十一月二十五日一軍作命丙第四十三號ニ基キ編成ヲ新ニスル」¹⁷と決めた。成立当初と違って、今回の再編の時、その命令や支持を出したのは第一軍の直接命令である。今度は109師団の指示や命令は見られない。そして、その班長も変わって、第一軍軍医部のメンバーが担当することになった。こう見ると、改編後の太原臨時衛生調査班という組織の地位やレベルもアップして、109師団に代わって第一軍軍医部からの人が指揮するようになり、当班への直接指導やコントロールを強化することになる。業務展開や他の連携機関の変動もあって、太原臨時衛生調査班の事務所も変わった。「昭和十四年五月二十五日太原陸軍病院ノ拡充ニ伴ヒ、又一方當班業務将来ノ發展性ニ鑑ミ從來使用セシ建物一切ヲ太原陸軍病院ニ移管シ現在地ニ移転ヲ完了セリ」と記した。¹⁸ 太原陸軍病院の拡充及び「當班業務将来ノ發展性」を考慮して、太原臨時衛生調査班は1939年5月25日から山西川至医学専科学校より移動し、使用中だった建物も太原陸軍病院の拡充工事のため移転させた。「業績集」の序文の中における「現在地」とはどこか、まだ不明な点もあるため、更なる実証研究が必要であろう。

再編を経た太原臨時衛生調査班は、班長が代

わったほか、班長の肩書もレベルアップした。と同時に、当班の調査研究の方針と任務も再確認され、成立当初の「其ノ目的トスル所ハ山西地方ニ於ケル衣、食、住、業等ノ衛生学的事項ノ調査研究を遂ゲ、現在及び将来ノ衛生対策ノ資料ヲラシムルニアリ」から「今次作戰ニ直接必要ナル緊急問題ヲ第一トナスハ勿論ナルモ又将来ニ於ケル北支ノ衛生開発を顧慮シ我軍及び我同胞ガ此地ニ定住スルニ必要ナル凡ユル健康問題及び今後我々ト一層交渉深キ支那人ノ健康ヲモ其ノ調査研究ノ対照トナシ、之等ノ現状ヲ明ニスルト共ニ其ノ當為ヲ研究シ科学的指導原理ヲ興ヘントスルニアリ。」と変換されてきた。¹⁹ つまり、太原臨時衛生調査班は「臨時編成」されたものであるが、「現在及び将来の顧慮」し、「此地ニ定住」し、「衛生対策」の側面で軍事作戰には「衛生対策ノ資料」と「科学的指導原理」を提供するのは一貫して当班の活動の長期的な目標の一つと言えよう。

「研究ノ必要上」、再編を経た太原臨時衛生調査班はその内部の部門分けや班員の構成も新たに調整して、「部門ヲ衛生学部、化学部、病理学部及び細菌学部ニ分カチ」した。²⁰ と同時に、第一軍の作戰命令に基づいて、新たなメンバーが入ってきた。「一軍作命丙站第四二八號」によって、山西省兵要衛生調査要員も当班に加入して、協調して「互ニ緊密ナル連繫ノ許ニ調査研究を続行」させた。²¹ 1939年6月に、新たなメンバーとして山西兵要調査要員、太原陸軍病院分病室主任、陸軍軍医中尉である古賀久治が加入し、村上賢三、木村義国、伊藤亮等3人と協調して、太谷、南関鎮、樺店方面における水質調査を実施、関連報告を提出した。²² また、山西兵要調査要員気賀沢杉人と中島正三も加入してきた。前者は1939年から1940年にかけて5回にわたって太原臨時衛生調査班の調査や研究に

参加した。後者は3回調査研究に出た。²³ 因みに、山西兵要調査要員からの新たなメンバーとして、兵舎家屋事情や食物、飲用水の水質などの兵要に関する衛生的状況に関心を持っているため、上記の古賀久治、気賀沢杉人と中島正三が関与した太原臨時衛生調査班の調査や研究は大体以上の分野に限られている。太原臨時衛生調査班との協力調査のほか、山西兵要調査要員らは山西省兵要衛生に対する関連調査本業も継続していた。例えば、古賀久治は1939年11月と1940年6月には、山西省における飲用水と北西部の兵要気象および衛生地誌について調査を実施し、調査報告を提出した。²⁴ これは太原臨時衛生調査班は上記の調査に関与していないため、当調査班の「業績集」に入っていないのである。

班員の構成の調整では、山西兵要調査要員らの加入のほか、日本学術振興会と日本金沢医科大学からも新たに「嘱託」として人が派遣され、支持や「研究補助」を受けた。「人類體質学的調査研究ノ一部ニ対シテハ、日本学術振興会ヨリノ研究補助ヲ受け」、「化学的研究事項ニ対シテハ金澤医大派遣研究員、塚本、早稲田両博士及び伊藤学士ノ援助ヲ受ケタリ」のである。²⁵ 前者は「人類體質学的調査研究」では、後者は「化学的研究事項」では調査や研究補助を提供した。「業績集」の記載によると、「人類體質学的調査研究」では関連調査や研究は計9篇であり、村上賢三、田辺源流、石崎有信、木村義国、森部令次ら5人が関与したことが分かった。そのうち、関連調査や研究の主なメンバーとして、田辺源流、石崎有信、木村義国ら3人は活躍しており、それぞれ調査や研究を2篇実施したほか、村上賢三ら4人と合同で2篇の調査研究に関与した。内容から見れば、上記の調査研究は山西太原地方住民の生体測定研究（頭部や顔面など

の身体各部諸測定）、発育過程の生体測定、顔面の特徴及び容貌学的観察、歯穹ノ人類学的研究、指紋調査、体力調査と血清学的調査に至っている。実は太原臨時衛生調査班成立直後の1938年には、日本学術振興会は既に関連調査研究に関与した。1938年2月には、石崎有信は「山西省人口統計ニ関スル二三ノ観察」という研究報告を提出した。同年4月、木村義国も加入し、関口永と連携して「山西省ニ於ケル急性伝染病ニ就テ」という調査報告を提出した。5月になると、田辺源流と森部令次も調査班に入り、6月には村上賢三は加入して調査報告を提出した。1938年5月に森部令次による血液型についての関連調査報告が提出されたあと、1939年に入ると「人類體質学的調査研究」は高潮期に入り、この一年間で関連調査研究報告は8篇にも上った。ちなみに、上記の「嘱託」である石崎有信、木村義国、田辺源流らは、「人類體質学的調査研究」だけでなく、太原臨時衛生調査班のほかの調査研究には広く関与したのである。彼らの調査研究は人口生育、建築衛生学（家屋やトーチカの換気、暖房力、照度、便所など）、口腔学、耳鼻咽喉科、化学（水質調査、硬水軟化、石鹼など）など幅広い分野にわたっている。太原臨時衛生調査班の調査研究活動には大きな支持や研究補助を与えたと言えよう。

その一方、日本金沢医科大学からの「嘱託」は調査班の「化学的研究事項」の力を強くした。その連携は調査班のキーパーソンである村上賢三と深い関わりがありそうである。1928年2月9日から、村上賢三は日本官立金沢医科大学助教授になり、肩書も陸軍軍医少尉から中尉へと抜擢されてきた。1940年8月には、天皇勅命によって同大学の教授になり、衛生学学科の責任者に当たった。²⁶ 「嘱託」として、金沢医科大学の塚本赳夫と早稲田正澄の2人の博士と伊藤亮

学士は当大学の衛生学学科の責任者である村上賢三の斡旋で太原臨時衛生調査班に新たに加わったと思われる。「業績集」によると、上記の3人は「化学的研究事項」では調査班に支持を与え、その調査研究の分野は「特殊検査」、「山西省産漢薬調査」、「水質調査測定及び硬水軟化」、「食物ノ種類及び其ノ栄養価値」などに渡っている。調査研究に関与した数と研究対象や分野はそれぞれ違うが、表1の示した通り以下の業績を残した。1939年2月、早稲田正澄に先だて、塚本赳夫と伊藤亮は調査班に加入し、「特殊検査」を実施して、同2月と3月には早く山西省漢薬、山西省産赤酒（赤葡萄酒）、山西省産胡麻油代用油の品質、大同産アルコール及び山西省産支那酒の調査研究報告を4篇提出した。4月に入ると、早稲田正澄も加入し、109師団軍医部部長の指示によって山西省榆次へ行って、源渦鎮付近地表の白色物質について調査分析して、そして調査報告としてその分析成績や調査結果を提出した。3人のうち、塚本赳夫が関与した調査研究は少なく、提出した報告は2篇しかなかった。次いで早稲田正澄であり、調査

報告を5篇提出した。伊藤亮は一番活躍しており、計7篇もの調査研究報告を提出した。塚本赳夫ら3人は太原臨時衛生調査班での調査研究は1939年11月まで続いた。調査対象と内容から見ると、前期と後期には変化が見られ、前期は「漢薬検査」や「特殊検査」がメインであるが、同4月からだんだん濾水器性能、水質調査、水の硬度測定、硬水軟化及び食物の種類や栄養価に及んできた。²⁷

上述の通り、再編を経た太原臨時衛生調査班は班長を変え、管理システムを刷新した。と同時に、新たなメンバーが入り、「一同互ニ協力シ」、「太原市内ニ散逸シ在リシ参考書類、硝子器材、薬品等ノ蒐集ニ努メ研究室ノ充実を計レリ」²⁸と業務に取り組んで、業務の展開をだいに推進してきた。こうして、「業績集」の通り、太原臨時衛生調査班の調査研究も1938年の16篇から一躍して1939の33篇へと倍増してきたのである。

報告を作成時間順に整理すると、太原臨時衛生調査班の調査業績は次の表1の通りである。

表1. 太原臨時衛生調査班の調査業績一覧²⁹

番号	報告時間	業績名称	人 員	所属や肩書
1	1938年1月	太原城内外部隊使用井水ノ水質検査成績	橋本紋兵衛	陸軍薬剤少尉
2	1938年2月	山西省人口統計ニ関スル二三ノ観察	石崎有信	陸軍軍医少尉
3	1938年4月	炕ノ暖房力ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医少尉
4	1938年4月	山西省ニ於ケル急性伝染病ニ就テ	関口 永 木村義国	陸軍軍医大尉 陸軍衛生部見習士官
5	1938年5月	山西地方人ノ血液型調査	森部令次	陸軍軍医大尉
6	1938年5月	太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的観察（第一報）	田辺源流	陸軍軍医少尉

7	1938 年 6 月	山西地方ニ於ケル支那家屋ノ衛生学的考察 (其ノ一)：建築様式、構造及ビ間取ニ就テ	村上賢三	陸軍軍医少尉
8	1938 年 7 月	太原城外ノ支那兵営内空気の理学的状態ニ 就テ	村上賢三	陸軍軍医少尉
9	1938 年 7 月	太原地方住民ノ口腔及ビ歯牙ノ衛生学的観 察 (第二報)	田辺源流	陸軍軍医少尉
10	1938 年 8 月	支那家屋ノ換気ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医少尉
11	1938 年 8 月	太原市井水ノ衛生学的調査成績	橋本紋兵衛	陸軍薬剤少尉
12	1938 年 8 月	山西地方住民ノ耳鼻咽喉科疾患ノ統計的観 察	木村義国	陸軍衛生部見習士官
13	1938 年 9 月	熱性疾患患者八例ノ血液、尿ヨリ BACTERIUM ASIATICAM ノ証明	関口 永 藤野恒三郎	陸軍軍医大尉 陸軍衛生部見習士官
14	1938 年 10 月	太原市住民の増殖力ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医中尉
15	1938 年 11 月	太原市居住婦人ノ初潮年齢ニ就テ	田辺源流 石崎有信	陸軍軍医中尉
16	1938 年 11 月	太原市住民ノ乳児死亡率ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医少尉
17	1939 年 1 月	山西地方ニ於ケル支那家屋ノ衛生学的考察 (其ノ二)：室ノ床面積、室高、気積及ビ窓 ノ大サニ就テ	村上賢三	陸軍軍医中尉
18	1939 年 1 月	山西省太原住民ノ血清学的調査 (其ノ一)： ウィダール反應、ワイルフェリックス反應、 徴毒反應ニ就テ	関口 永 藤野恒三郎 木村義国	陸軍軍医大尉 陸軍衛生部見習士官 陸軍衛生部見習士官
19	1939 年 2 月	山西省産漢薬調査	塚本赳夫	嘱 託
20	1939 年 2 月	山西省産赤酒 (葡萄酒) 検査成績	塚本赳夫 伊藤 亮	嘱 託 嘱 託
21	1939 年 3 月	山西人及ビ河北人歯穹ノ人類学的研究 (第 一報)	田辺源流	陸軍軍医中尉
22	1939 年 3 月	山西人及ビ河北人歯穹ノ人類学的研究 (第 二報)	田辺源流	陸軍軍医中尉
23	1939 年 3 月	山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査 (第 一報 「米」)	伊藤亮	嘱 託
24	1939 年 3 月	山西省産胡麻油代用油ノ品質検査成績	塚本赳夫 伊藤 亮	嘱 託 嘱 託
25	1939 年 3 月	大同産アルコール及ビ山西省産支那酒ノ検 査成績	伊藤 亮	嘱 託
26	1939 年 3 月	北支ニ於ケル厕所改善ノ一方法：特ニ「北 支改良内務省式便所」(仮称)ニ就テ	村上賢三 石崎有信	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉

27	1939 年 3 月	病理解剖記録	渡辺四郎	陸軍軍医中尉
28	1939 年 4 月	軍管理山西第八工場試作濾水器ノ性能ニ就テ	木村義国 伊藤 亮	陸軍軍医中尉 嘱 託
29	1939 年 4 月	源渦鎮付近地表ノ白色物質分析成績	早稲田正澄	嘱 託
30	1939 年 4 月	【附】 AZTOMETRIE 実施法	早稲田正澄	嘱 託
31	1939 年 5 月	山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査（第二報）	伊藤 亮	嘱 託
32	1939 年 5 月	太原市ニ於ケル井水ノ硬度ニ就テ 特ニ一時硬度ト永久硬度並ニ硬度トクロールノ含量ニ就テ	村上賢三 田辺源流	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉
33	1939 年 6 月	太谷、南関鎮、樵店方面ニ於ケル水質調査報告 【附】同方面ニ於ケル兵要衛生地誌（給水状況）	村上賢三 木村義国 伊藤 亮 古賀久治	陸軍軍医中尉 陸軍軍医少尉 嘱 託 山西省兵要衛生調査要員、陸軍軍医中尉
34	1939 年 8 月	太原市住民ノ体力ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医中尉
35	1939 年 8 月	太原市住民ノ生体測定学的研究（其ノ一）：頭部、顔面ヲ除ク身体各部ニ関スル測度ニ就テ	村上賢三 田辺源流 石崎有信 木村義国	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医少尉
36	1939 年 9 月	支那家屋内空気ノ理学的状態ノ研究	田辺源流	陸軍軍医中尉
37	1939 年 10 月	太原市住民ノ生体測定学的研究（其ノ二）：頭部及ビ顔面ノ諸測度ニ就テ	木村義国	陸軍軍医少尉
38	1939 年 10 月	太原城外汾河橋梁附近ニ於ケル新旧「トーチカ」ノ衛生学的研究	村上賢三 田辺源流 石崎有信 木村義国	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医少尉
39	1939 年 10 月	山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第一報 冬季篇）	村上賢三 気賀沢杉人	陸軍軍医中尉 山西省兵要衛生調査要員、陸軍軍医中尉
40	1939 年 11 月	山西人及ビ河北人ノ顔面ノ特徴ニ就テ（人類学的の並ニ容貌学的の觀察）	木村義国	陸軍軍医少尉
41	1939 年 11 月	太原市住民ノ指紋ニ就テ	石崎有信	陸軍軍医中尉
42	1939 年 11 月	太原市ニ於ケル硬水用洗濯石鹼ノ検査成績	石崎有信	陸軍軍医中尉
43	1939 年 11 月 報告予定	山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第二報 春秋季篇）	村上賢三 気賀沢杉人	陸軍軍医中尉 山西省兵要衛生調査要員、陸軍軍医中尉
44	1939 年 11 月 報告予定	山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第三報 夏季篇）	村上賢三 気賀沢杉人	陸軍軍医中尉 山西省兵要衛生調査要員、陸軍軍医中尉

45	1939 年 11 月 報告予定	支那家屋内ノ照度ニ就テ	村上賢三 田辺源流	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉
46	1939 年 11 月 報告予定	水ノ硬度測定方法ノ比較研究	村上賢三 田辺源流 早稲田正澄	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 嘱託
47	1939 年 11 月 報告予定	硬水軟化ニ関スル研究	村上賢三 田辺源流 早稲田正澄 大島英男	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 嘱託 北支那防疫部太原支部、陸軍薬剤少佐
48	1939 年 11 月 報告予定	太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ 栄養価ニ就テ（其ノ一）：下級生活者ノ主食 物、副食物及ビ間食ニ就テ	村上賢三 中島正三	陸軍軍医中尉 山西省兵要衛生要員、陸軍軍医中尉
49	1939 年 11 月 報告予定	發育過程ニ於ケル太原市住民ノ生体測定学 的研究	村上賢三 田辺源流 石崎有信 木村義国	陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉 陸軍軍医中尉
50	1940 年 6 月	山西省ニ於ケル食品ノ研究（第三報）：下 級労働者ノ主ナル食品ニ就テ	三宅惣八郎 中島正三	太原臨時衛生調査班 班長、陸軍軍医中佐； 陸軍軍医中尉
51	1940 年 9 月	山西省ニ於ケル食品ノ研究（第四報）：現地 販売鶏卵ノ新鮮度ニ就テ	三宅惣八郎 中島正三	太原臨時衛生調査班 班長、陸軍軍医中佐； 陸軍軍医中尉
52	1940 年 10 月	作戦後ニ於ケル兵員尿中「ビタミン」C 量 並ニ体力消耗ノ状況ニ就テ	中島正三	陸軍軍医中尉
53	1940 年 11 月	洞窟兵舎使用ノ注意事項	気賀沢杉人	陸軍軍医中尉
54	1940 年 11 月	潞安附近特殊家屋ニ於ケル衛生学的調査	気賀沢杉人	陸軍軍医中尉

出所：関連資料より筆者作成

当調査班班員の努力で業務展開が順調になり、「班長三宅中佐ノ下ニ班員一同常ニ創設者ノ卓見ヲ思フト共ニ當班任務ノ重大ナルヲ自覚シ、和衷協同其ノ任務ノ達成ニ邁進シツアリ。」³⁰である。が、1939年末になると、太原臨時衛生調査班の業務は難しくなってきた。11月の当班の業績を振り返ると、村上賢三は「太原臨時衛生調査班ハ作戦ノ唯中ニ創設セラレ研究資材ノ整備全カラズ」、さらに「途中機構ノ改変並ニ頻回ナル人事の異動アリテ」、また「作戦毎ニ将校、下士官、兵ノ異動頻回ニ行ハレ業務ノ遂行上支障ヲ来ス事屢々ナリシ」であるため、現状は「難行ヲ続ケツツアル」羽目になったと指摘した。³¹ まして、キーパーソンである村上賢三の離脱は当班の業務展開をさらに悪化させた。1940年8月には、村上賢三は日本官立金沢医科大学に復帰し、天皇勅命で同大学の教授となり、衛生学学科の責任者に当たった。そして、翌月になると、「在籍多年、成績優良」とし、当時の関東軍参謀総長飯村穰から誘われ、日本文部省の許可を得たうえで、偽満洲国哈爾賓医科大学の教授へと転任した。³²

方面軍軍医部部長平野と第一軍軍医部部長木村の指示に基づき、太原臨時衛生調査班はその調査研究業績をまとめ、そして、未提出の調査研究報告を早く整理し提出するようという指示が出された。表1のように、「11月に報告予定」の調査や研究は7篇もあるのが分かる。1939年11月には、第一軍軍医部は、1938年1月から1939年11月までの太原臨時衛生調査班に提出された四十数篇もの調査研究報告をまとめてその結論の部分だけを抄録し、「太原臨時衛生調査班業績集」と題して、一冊と整理した。同12月、第一軍軍医部部長木村の指示に基づき、「山西地方ノ衛生対策ノ参考資料」として、その「業績集」は各部に配付された。³³ 北支方面軍軍

医部と第一軍軍医部のこの一連の指示を見ると、太原臨時衛生調査班の余命僅かになっていくかと垣間見られよう。

表1のように、1940年に入ると、太原臨時衛生調査班の調査や研究は大幅減少し、4篇しか見えなかった。当時の班長として三宅惣八郎中佐本人も関与した調査研究が見られる。³⁴ 1940年9月20日から10月31日まで、太原臨時衛生調査班班員、山西兵要衛生調査要員、陸軍軍医中尉である気賀沢杉人らが第一軍に山西省長治夏店鎮地方へ派遣され、洞窟兵舎の衛生的調査を実施した。そして、11月10日に第一軍軍医部には「潞安附近特殊家屋ニ於ケル衛生学的調査」と「洞窟兵舎使用上ノ注意事項」という調査研究報告を2篇提出した。これも太原臨時衛生調査班の最後の調査報告なのである。同年12月22日に、井関部隊軍医部長石井正己が上記の気賀沢杉人の2篇の調査報告を参考資料として近藤部隊の医官宛てに配付した。³⁵ これが最後で、太原臨時衛生調査班は歴史から影を隠し、档案史料から姿が消えるようになった。

太原臨時衛生調査班の活動業績のまとめである「業績集」では、村上賢三は「約二ヶ年間ニ調査研究ヲ遂ゲ上司ニ報告書ヲ提出セルモノ四十数篇ニ及ベリ。而レドモ我等浅学菲才未ダ所期ノ目的ニ副ハザル所多キヲ懼ル。」³⁶と述べた。上記の村上報告³⁷の記載の「四十数篇」のほか、また当班による調査報告も何篇も見られる。

上記のように、太原臨時衛生調査班は約3年に渡って、山西地方において衛生学的調査研究を実施、計53篇もの調査研究報告を提出したのである。

Ⅲ. 太原臨時衛生調査班の調査や研究活動

1939年11月にまとめられた「村上報告」では、1938年から1939年までの約2年間の太原臨時衛生調査班による調査研究活動を全面的に回顧し、その調査研究報告の結論の部分だけを抄録して一冊にまとめた。それを通じ、その調査研究活動の粗筋が見える。一方、2022年6月に「張蔵報告」の発見によって、その調査研究活動の更なる詳しい経緯が見られるようになってきた。また、日本国立公文館アジア歴史史料センター所蔵の関連史料を利用して、村上報告の1939年11月以降の太原臨時衛生調査班の活動が明らかになった。

1. 村上報告とその主な内容

村上報告は方面軍第一軍軍医部部長平野と第一軍軍医部部長木村の指示に基づき、1939年11月に第一軍軍医部によって作成されたものであり、その内容は1938年1月から1939年11月までの約2年間の当調査班の調査研究活動に触れ、「四十数篇」の調査報告を提出したとした。太原臨時衛生調査班のキーパーソンである村上賢三に頼んで「序」を書いた。そして、第一軍軍医部部長木村の指示に基づき、「山西地方ノ衛生対策ノ参考資料」として、その「業績の結論」を抄録して一冊にまとめて各部に配付された。³⁸

内容から見ると、村上報告は次のように実地調査研究と衛生事業に関する法的資料の蒐集調査の二種類に大別される。前者としては、太原臨時衛生調査班は約2年間で計49篇の調査研究報告を提出した。その内容は「住居ニ関スル調査研究」、「食物及び飲料水ニ関スル調査研究」、「人類体質学的調査研究」、「人口増殖ニ関スル調査研究」、「各種疾病ニ関スル調査研究」、「漢薬ニ関スル調査研究」、「特殊検査成績」と七種類に及んだ。

具体的に見ると、「一、住居ニ関スル調査研究」では12篇の調査研究があり、それぞれ「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ衛生学的考察（其ノ一）：建築様式、構造及び間取ニ就テ」、「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ衛生学的考察（其ノ二）：室ノ床面積、室高、気積及び窓ノ大サニ就テ」、「支那家屋ノ換気ニ就テ」、「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第一報 冬季篇）」、「支那家屋内空気ノ理学的状態ノ研究」、「炕ノ暖房力ニ就テ」、「支那家屋内ノ照度ニ就テ」、「北支ニ於ケル厕所改善ノ一方法：特ニ「北支改良内務省式便所」（仮称）ニ就テ」、「太原城外ノ支那兵営内空気ノ理学的状態ニ就テ」、「太原城外汾河橋梁附近ニ於ケル新旧「トーチカ」ノ衛生学的研究」、「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第二報 春秋季篇）」、「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第三報 夏季篇）」である。

「二、食物及び飲料水ニ関スル調査研究」では11篇の調査研究があり、それぞれ「山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査（第一報「米」）」、「山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査（第二報）」、「太原城内外部隊使用井水ノ水質検査成績」、「太原市井水ノ衛生学的調査成績」、「太原市ニ於ケル井水ノ硬度ニ就テ 特ニ一時硬度ト永久硬度並ニ硬度トクロールノ含量ニ就テ」、「太谷、南関鎮、権店方面ニ於ケル水質調査報告 【附】 同方面ニ於ケル兵要衛生地誌（給水状況）」、「軍管理山西第八工場試作濾水器ノ性能ニ就テ」、「水ノ硬度測定方法ノ比較研究」、「硬水軟化ニ関スル研究」、「太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ栄養価ニ就テ（其ノ一）：下級生活者ノ主食物、副食物及び間食ニ就テ」、「【附】 AZTOMETRIE 実施法」である。

「三、人類体質学的調査研究」では9篇の調査研究があり、それぞれ「太原市住民ノ生体測定学的研究（其ノ一）：頭部、顔面ヲ除ク身体各部ニ関スル測度ニ就テ」、「太原市住民ノ生体測定学的研究（其ノ二）：頭部及ビ顔面ノ諸測度ニ就テ」、「發育過程ニ於ケル太原市住民ノ生体測定学的研究」、「山西人及ビ河北人ノ顔面ノ特徴ニ就テ（人類学的並ニ容貌学的觀察）」、「太原市住民ノ体力ニ就テ」、「山西人及ビ河北人齒穹ノ人類学的研究（第一報）」、「山西人及ビ河北人齒穹ノ人類学的研究（第二報）」、「太原市住民ノ指紋ニ就テ」、「山西地方人ノ血液型調査」である。

「四、人口増殖ニ関スル調査研究」では4篇の調査研究があり、それぞれ「山西省人口統計ニ関スル二三ノ觀察」、「太原市住民の増殖力ニ就テ」、「太原市居住婦人ノ初潮年齢ニ就テ」、「太原市住民ノ乳児死亡率ニ就テ」である。

「五、各種疾病ニ関スル調査研究」では7篇の調査研究があり、それぞれ「太原地方住民ノ口腔及ビ齒牙ノ衛生学的觀察（第一報）」、「太原地方住民ノ口腔及ビ齒牙ノ衛生学的觀察（第二報）」、「山西省ニ於ケル急性伝染病ニ就テ」、「熱性疾患患者八例ノ血液、尿ヨリ BACTERIUM ASIATICAM ノ証明」、「山西省太原住民ノ血清学的調査（其ノ一）：ウィダール反應、ワイルフェリックス反應、黴毒反應ニ就テ」、「山西地方住民ノ耳鼻咽喉科疾患ノ統計的觀察」、「病理解剖記録」である。

「六、漢薬ニ関スル調査研究」では1篇の調査研究があり、「山西省産漢薬調査」である。

「七、特殊検査成績」では5篇の調査研究があり、それぞれ「山西省産赤酒（葡萄酒）検査成績」、「山西省産胡麻油代用油ノ品質検査成績」、「大同産アルコール及ビ山西省産支那酒ノ検査成績」、「太原市ニ於ケル硬水用洗濯石鹼ノ検査

成績」、「源渦鎮付近地表ノ白色物質分析成績」である。

実地調査のほか、太原臨時衛生調査班は盧溝橋事変前後の山西省の衛生事業面の関連法案についても調査した。その内容は、山西省及び省庁所在地太原市の屠殺牛乳畜肉営業、伝染病予防及び一般公共衛生事業、薬剤師薬種商、麻薬及び製薬などの事業、旅館、飲食店、理髪店、浴場、娯楽場などのサービス業、医師、歯科医、助産婦などの医療事業、妓女検診などについての計六種類45本もの法規や辦法に及んでいる。³⁹

上記の調査研究の目的は明らかであり、「現在及ビ将来ノ衛生対策ノ資料タラシムルニ」あり、「科学的指導原理ヲ興ヘントスルニ」あり、その内容は多種多様である同時に、明確な問題意識があると言えよう。調査班の調査研究の方針と任務は一貫して明確であり、後期にはいったん調整を経へたが、「今次作戦ニ直接必要ナル緊急問題ヲ第一トナス」とするが、「山西地方ニ於ケル衣、食、住、業等ノ衛生学的事項ノ調査研究」特に日本人生活上欠かせない「住」「食」及び「急性伝染病」などの問題やその対策については調査班の注目点であり、関連調査や研究には大きな努力を重ねられてきた。村上報告の作成後の1940年に実施された4篇調査研究もまた「食」と「住居」についてのものである。調査対象としては、中国側だけでなく、日本側の事情も考慮に入れられた。「将来ニ於ケル北支ノ衛生開発を顧慮」し、「今後我々ト一層交渉深キ支那人」であるため、「我同胞ガ此地ニ定住スルニ必要ナル凡ユル健康問題」として、中国人の健康調査も調査研究の対象に入れたわけである。

村上報告の結論の部分を要約すると、以下の通りである。

（一）「住居ニ関スル調査研究」では、主に日

本軍常住の兵舎及び兵舎扱い可能な山西省地元の中国人住民の家屋の建築様式や構造、そして仮設住居の新旧トーチカや便所等に集中しており、その内容は家屋の換気や照度、春夏秋冬四季の家屋室内の気温、気湿や湿度、冬季炕の暖房力及び便所の使用などに至っている。調査研究を通じ、日本人が「快適」な、「健康生活に適當ナル」環境作りをさせるため、太原臨時衛生調査班は住居環境について次のように一連の「衛生対策」と「化学的指導」を提出した。例えば、「換気ト採光ヲ良好ナラシムル様」、窓の増設あるいは窓のサイズを多くしたり、家屋の構造を改善したりするのが必要である。「良好ナル暖房装置」である炕の利用に「慣ルルヲ要」して、その構造を改善してまた「補助的暖房装置」を増設すれば「快適ナル温度ヲ得」ることができる。太原地元附近では、トイレの「冬季の凍結ヲ防グ」ため、便所の構造の改善に成功して、「冬期外氣ノ気温最低零下二十一度ニ下リタル時モ氷結スルコトナク良好ナル結果ヲ示シオレリ」とした。⁴⁰

(二)「食物及び飲料水ニ関スル調査研究」では、山西省出產の食物の種類と栄養学的調査、太原附近の飲用水及び「特殊検査」と呼ばれる山西省出產の赤酒（赤葡萄酒）と白酒と胡麻油代用油などについてのものはメインである。食物や飲用水だけでなく、酒類や油類のモノにも触れた。食物不足や「現地自活」の対策として、国内からの搬送が難しくなる日本人常食の「米」だけでなく、「代用食品トシテ或ハ種々ナル加工食品ノ原料トシテ重要ナル」として、粟・麦類・コウリヤン・トウモロコシ、豆類などについても調査された。⁴¹ また「水質甚ダシク不良ニテ飲料水判定標準ニ照シ其ノ儘ニテ飲料ニ適スルモノハ一個モナキ状態ナリ」として、太原市井水の水質について検査や衛生学調

査が実施された。⁴² 井水の高硬度のため、飲用水として「煮沸ヲ厳守セシムルヲ要」して、また工業用水の面でも「硬水軟化」は「太原市ノ現状ヨリ見ル時ハ殊ニ工業的方面ニ於テ緊急ノ問題」として、井水の硬度についても調査した。⁴³ 調査研究を通じ、「衛生対策」や「化学的指導」としては、次のように提案した。「将来井水ガ地上ヨリノ汚水及び汚物ノ為ニ汚染セラレザル様」、「汚物及び地下水ノ處置ヲ完全ニスルコト」と共に「井戸ノ構造ト汲上方法ヲ改善スル事ハ焦眉の急」である。更に「将来ハ全市ノ下水道ヲ完備スル」と共に、「適當ナル水源ヲ求メ上水道ヲ全市ニ敷設スル事は極メテ必要ナリ」と指摘した。⁴⁴ 硬水の測定と軟化問題について、「簡單正確ニ測定シ得」る BLACHEB 氏法という測定法を得て、「硬水軟化」の方法も提出した。この方法ニテ「硬度四乃至五度ニ低下セシムル事ハ容易ナルモ百度前後ノ水ニ於テハ二十度以下ニ低下セシムル事ハ困難ナルガ如シ」として、「軟化セシメタル水」は「飲用可能ナル」と指摘した。工業用水の面では、軍管理山西第八工場試作濾水器ノ性能について調査研究は実施された。⁴⁵

(三)「人類體質学的調査研究」では、日本、朝鮮、河北、河南、大連出身の人々と対照研究し、人類體質学の視点から山西人の体型、發育過程の特徴、顔面の特徴、体力及び歯弓、指紋、血液型などについて調査したものである。調査研究を通じ、太原臨時衛生調査班は次のような調査結果や人類體質学特徴を得た。日本人に比して、「山西人ハ細長キ民族」であり、「栄養状態ハ不良」であり、「上半身ノ發育ハ比較的弱キ民族」であるため、「労働力ヲ涵養スル為ニ食糧問題ヲ解決シ、栄養状態ヲ可良ナラシムルヲ第一ノ要点ナリ」と信じた。「山西人ハ頭長小ニシテ、頭幅大」「山西人ノ顔ハ比較的面長

ナリ」「太原市ノ方日本人ニ比シテ鼻根高キモノ多シ」「肺活量、握力及び背筋力ノ測定ヲ行ヒタルニ、三者共ニ日本人ニ比シ劣レリ。特ニ背筋力ニ於テ著シキ差ヲ示セリ」「山西人ハ河北人ニ比シ異常咬合多シ」「指紋ハ山西人ト河北人ハ殆ド差ナシ」「血液型B型ノ出現頻度大ナリ」である。⁴⁶

(四)「人口増殖ニ関スル調査研究」では、山西省の人口（人口統計と乳幼児の死亡率）と太原市住民の増殖力についてのものが見られる。調査研究を通じ、太原臨時衛生調査班は次の通り結論を得た。「従来太原市及び山西省ニ於テ行ハレアリシ人口統計ハ比較的完全ナルモノナルベキモ尚極メテ不正確ナリ」「大体ニ於テ太原市ノ乳児死亡率ハ一六％前後ナリト推算セリ」「太原市ニ居住セル婦人ノ平均初潮年齢ハ約十五年ニヵ月ナリ」「増殖力ハ日本人ニ比シテ甚だ弱シ」「日本民族ニ比シテ漢民族の増殖生活ハ決シテ健康ニ非ズソノ増殖力ハ退化シアリト結論を得ベシ」である。⁴⁷

(五)「各種疾病ニ関スル調査研究」では、山西省における急性伝染病、住民の血清学調査、口腔及び歯牙の衛生学観察及び耳鼻咽喉科疾患の統計的観察などが見られる。また、1939年3月の5例の「病理解剖記録」も収録された。調査研究を通じ、太原臨時衛生調査班は次の通り結論を得た。「山西省内ノ伝染病ニ関スル調査ハ信用アル日本医師ノ山西省内進出ニヨリテ始メテ達成セラルベキモノ」であり、「山西省ノ地理的位置ト住民ノ素質風習トハ當地方ノ防疫問題ニ対スル関心を最高度ニ要求スルモノニシテ、山西省伝染病ニ関スル調査研究ハ爾今最大の努力ヲ傾倒セラルベキモノナリ」と提案した。血清的調査では「太原住民ノ示ス×19ニ対スル凝集価ハ健康日本兵員ノ其レニ比シ高度ナルコトヲ認ム」。耳鼻咽喉科では「耳ノ疾患

中、耳聾栓塞ハ日本人ニ比シ遙ニ高率ナリ」であり、「鼻ノ疾患中慢性肥厚性鼻炎ハ極メテ少シ之ニ反シ慢性消瘦性（萎縮性）鼻炎ハ極メテ多数ナリ」であり、「咽喉ノ疾患中口蓋扁桃腺肥大症ハ甚ダ少数」である。「齲齒発生ノ少キ」であり、その主な理由は「飲食物中ニビタミンC及ビカルシウムノ含量多キ野菜及ビ果物ヲ多ク摂取スル事ト硬度高キ飲料水ヲ常用スル事及ビ糖分摂取ノ甚ダ少キコトニ基因スルモノナラン」と指摘した。⁴⁸

(六)「漢薬ニ関スル調査研究」では、当班に押収された数多くの漢薬標本より特に重要と考えられる麻黄、大黄、甘草、杏仁、黄蓍、大枣、石榴皮、柴胡、遠志、黄芩、台麝香、桔梗について調査されたが、その調査結果や結論は村上報告では見当たらない。⁴⁹

太原臨時衛生調査班の活動は太原やその附近にとどまらず、後期には山西省北部、中部や東南部に派遣され、水質や洞窟兵舎について衛生的調査を実施した。⁵⁰

上述の通り、村上報告は1938年1月から1939年11月までの約2年間の調査研究に触れており、計49篇の調査研究報告と45篇の衛生的法規資料が収録された。そのうち、陸軍軍医中尉田辺源流の「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的観察（第一報）」（1938年5月）と塚本赳夫の「山西省産漢薬調査」（1939年2月）では結論などの内容は見当たらず、村上賢三と気賀沢杉人の「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ保温保湿力ニ関スル研究（第二報 春秋季篇）」

（1939年11月報告予定）ではデータや図表の内容が見られる。ほかの調査研究は、村上報告ではその結論だけ抄録された。また、山西省衛生法規調査の面では、目次や法規の名前だけ記載してあるが、内容や中身は見当たらない。

つまり、村上報告によって、太原臨時衛生調

査班及びその調査研究活動の粗筋が見られる。調査過程やデータ資料などより具体的で細部のところは史料発掘によって更なる具体化が必要であろう。すると、以下の通り、2022年6月「張蔵報告」の浮上によって、ある程度村上報告での細部のところや史実は明らかにされてきた。

2. 張蔵報告の浮上とその価値

2022年6月には石家荘市民張志斌氏が史料蒐集調査の中、偶然に太原臨時衛生調査班に関する日本語調査研究史料を13冊蒐集した。太原市地元の新聞メディア《太原晩報》の報道によって、社会や学界からも注目されるようになってきた。⁵¹

新たに浮上した張蔵報告はすべて日本語で手書きのままで、太原臨時衛生調査班の研究の一次的資料として、太原臨時衛生調査班の存在とその調査活動の信憑性を物語った。この報告は上述の太原臨時衛生調査班業績集（山西地方二於ケル衛生対策参考資料）いわゆる「村上報告」と対照研究できて、お互いに内容上確認し合うことができよう。それを通じ、太原臨時衛生調査班とその活動の実態を明らかにするのも可能になろう。

調査研究の「結論」だけの抄録である村上報告と比して、張蔵報告はより詳しく、調査活動の背景、過程、データ資料、結論そして参考文献などの情報が見られる。また、そのうち、村上報告の中で結論内容抜きである陸軍軍医中尉田辺源流の「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的観察（第一報）」（1938年5月）も入っている。この一次的調査報告資料は現存する唯一のものと見られ、高い史料価値と文物的価値があると言えよう。

49篇もの調査報告がある村上報告と比べて、資料の数からみると、張蔵報告は13冊しか

ない。しかし、それはより詳しくより細部のところに富んだ一次的史料であるため、太原臨時衛生調査班とその活動の実態の研究でも重要な史料であり、史料自体価値も高い文物的価値もあると言えよう。

内容から見ると、村上報告の一部であり、より具体化した13冊の調査報告である。内容の対照確認を通じ、張蔵報告の中の炕、兵舎の空気と太原城外の新旧トーチカの衛生学調査という3冊はそれぞれ村上報告の実地調査の「一、住居ニ関スル調査研究」の第7、9と10篇目のものに当たる。食物の栄養学的調査2冊と硬水軟化研究は村上報告の「食物及び飲料水ニ関スル調査研究」の第1、2と9篇目のものに当たる。太原市住民の頭部や顔面などの生体測定学調査研究、体力調査と指紋調査の3冊の報告は村上報告の「三、人類体質学的調査研究」の2、5と8篇目の内容に当たる。太原市住民の増殖力についての調査は村上報告の「四、人口増殖ニ関スル調査研究」の2篇目の調査と合っている。太原地方住民の口腔及び歯牙の衛生学的調査2篇と山西省急性伝染病の調査はそれぞれ村上報告の「五、各種疾病ニ関スル調査研究」の1-3篇の内容と合っている。結論部分の内容から見ると、張蔵報告は村上報告と完全に一致しているのが分かる。

村上報告は太原臨時衛生調査班に関する研究の骨太や土台を築き、より詳しい張蔵報告はその肉付けをしてくれると言えよう。張蔵報告を通じ、太原臨時衛生調査班の詳しい経緯が見られる。たとえば、石崎有信は1938年2月の「太原市住民の増殖力ニ就テ」では、その「緒言」で増殖力調査の目的は「漢民族ノ増殖力ノ本態ヲ捉ルハ民族衛生学上ノ急務ナリト考ヘ今回ノ調査ヲ企図セルモノナリ」と言及し、その理由としては「高度ノ文化ヲ持チ豊カナル富力ヲ保

チ強大ナル武力ヲ誇ルトモ生物学的基礎タル増殖力ニ乏シキ民族ノ繁栄ハ一朝ノ夢ニ過ギザルベシ」と指摘した。⁵² また、伊藤亮は「山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査（第一報「米」）」（1939年3月）では、その「緒言」で米を調査対象にする理由に言及し、「吾人ハ米ヲ常食トス」「米ノ問題ハ吾人ニトリテ重大ナル意義ヲ有ス」、そして「大陸開発政策ノ基本ハ大陸資源ノ活用ニ有リ」、「内地米ハ輸送ニ多大ノ困難ヲ伴ヒ」と書いてある。⁵³ これらの具体的で詳しい内容は村上報告には記載されていないのである。

内容確認のほか、村上報告その一部の記載内容の訂正も必要であると分かる。村上報告の記載によると、村上賢三らの「硬水軟化研究」は「1939年11月報告予定」とあるが、張蔵報告では実は報告時間はだいぶ遅れて1940年1月に報告したことが分かった。⁵⁴ また、村上報告では「1939年11月報告予定」の村上賢三と中島正三の「太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ栄養価ニ就テ（其ノ一）：下級生活者ノ主食物、副食物及ビ間食ニ就テ」は1940年6月になると、太原臨時衛生調査班班長三宅惣一郎と中島正三の名義で「山西省ニ於ケル食品ノ研究（第三報）下級労働者ノ主ナル食品ニ就テ」と題して報告したわけである。⁵⁵

表1のように、1940年には、太原臨時衛生調査班は引き続き5回に渡って調査研究を実施した。これらはまた前述の村上報告の調査方針と任務に沿って、日本人の山西省に「定住」するとき最も重要な「飲食」と「居住環境」をめぐるって実施したわけである。前者は山西地方の「下級労働者ノ主ナル食品」と「現地販売鶏卵ノ新鮮度」についてであるが、後者は「潞安附近特種家屋」つまり「洞窟兵舎」への衛生学的調査である。⁵⁶ 1940年11月10日には太原臨時衛生

調査班班員賀沢杉人が最後の調査研究報告を提出した。その以降太原臨時衛生調査班は史料や資料から姿を消すようになった。

終わりに

上述の通り、軍事作戦に協調し、「現在及ビ将来ノ衛生対策ノ資料」や「科学的指導原理ヲ興ヘント」して、「山西地方ニ於ケル衣、食、住、業等ノ衛生学的事項ノ調査研究ヲ」遂げるため、太原陥落直後に太原臨時衛生調査班が編成された。第三野戦防疫部隊太原分遣隊、石家荘特別疾患収容班などの日本軍側のほか、当調査班は日本学術振興会と金沢医科大学からの支持を得た。その班員の多くは大学以上の学歴や教育歴があり、衛生学、人類体質学や化学などの専門的な知識を有する陸軍軍医ばかりである。

成立して以来、1937年12月27日から1940年11月10日まで、太原臨時衛生調査班は約3年にわたって、山西地方太原市及びその周辺地域に対して組織的な衛生学的調査研究を実施してきた。日本同仁会の調査⁵⁷と比べれると、当調査班の調査目的はより明確、より広域的であり、調査種類も豊富であると同時に明確な問題意識が見られる。山西省地方特にその省庁所在地太原附近の地域を絞って、居住環境、食物と飲用水、人類体質学、人口増殖力、各種の疾患、漢薬、物産などについて調査研究を行ってきた。三年近くの調査研究を通じ、当調査班は第一軍軍医部に計54篇の調査研究報告と計45篇の山西省地方の衛生的事業に関する法規資料を提出した。字面を見ると、名前には「太原」という文字があるが、太原臨時衛生調査班の調査研究範囲は「太原」とその付近にとどまらず、第一軍の派遣次第で、山西省の北部、中部および東南部へ行って調査したことがある。

これらの一連の調査は重要な価値がある。当時日本軍による侵略の中、山西省は戦争で大きな損失を被り、激動な時代に直面している。また、戦争期には、閻錫山政府の南下につれて、山西省や太原附近地域の衣、食、住、業、疾病、人口増殖、漢菜、物産などについての衛生的調査に取り組む余裕がなくなってきた。太原臨時衛生調査班の専門知識豊かな班員らによる調査や研究は、客観的に日本軍占領時の山西省の衛生的実態を理解するために外部の「他者」からの資料を提供した。この豊富な、詳しい史料と資料は日中戦争の歴史及び1930-40年代の日本軍占領下の山西地方社会の歴史や実態の研究のためにも資料的なサポートと参考を提供したと言える。

従来、戦時日本の対中調査研究では、東北やモンゴル地方の高原寒冷地域、上海や台湾などの東部東南地方の亜熱帯地域および河北などの平原温帯半乾燥地域についてのものが多いようである。それらと違って、太原臨時衛生調査班及びその活動は中国内陸部黄土高原乾燥地帯の調査研究のケーススタディを新たに提供してくれたと言える。また、戦争歴史研究には新たな「衛生学」の視点も与え、従来の軍事作戦以外の研究分野を多様化することができよう。史料の新たな発掘につれて、太原臨時衛生調査班に関する研究は更なる展開を迎えられよう。資料不足のため、太原臨時衛生調査班やその活動に関してはまだ不明なところがあり、それらを今後の課題として引き続き頑張っていきたいと思う。

注

- 1 代表的な著書は以下の通りである。原覚天『現代アジア研究成立史論—満鉄調査部・東亜研究所・

IPRの研究』、勁草書房、1984年；小島晋治、大里浩秋、並木頼寿編著『20世紀の中国研究』、研文出版、2001年；辛島理人『帝国日本のアジア研究総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』、明石書店、2015年；三好章編『アジアを見る眼 東亜同文書院の中国研究』、あるむ、2018年。

- 2 既に整理出版された代表的な資料としては、中国第二歴史檔案館編の《日本対華調査檔案資料選編》、《日本対華調査檔案資料統編》（中国社会科学文献出版社、2020年）と《近代日本対華調査檔案資料叢刊》（邵漢民等編著、中国国家図書館出版社、2019、2020年）などが挙げられる。中国社会科学院、中国国家檔案局と国家図書館は共同主催で、近代史研究所による共催の「抗日戦争与近代中日関係文献データベース」は、文献資料の電子化・デジタル化に対して多大な努力や取り扱いを重ねてきた。そのため、関連研究には大きな便宜を与えてくれたのである。
- 3 管見のところ、日中戦争期の日本側の関連衛生医療研究では日本同仁会を対象にするのがメインである。同仁会は戦時日本の対中医療衛生政策につながっているとされた組織である。同仁会及びその活動についての研究は次の通りである。丁蕾は同仁会の編成背景、人事と運営、主な活動と日本の対中政策への影響などについて検討した。飯島渉は日本外務省の関連檔案史料を利用して、同仁会による占領区におけるマラリア調査を対象に検討し、同会は戦時日本の対中医療衛生政策に直接関連があると指摘した。福田由紀は戦時同時会防疫班が上海防疫委員会に関与した史実に触れた。末永恵子は戦前と戦時の同仁会の対中医療支援活動についての比較研究を通じ、その支援活動やその性質が変わったとした。中西裕は翻訳家延原謙の同仁会医療班の中国派遣の事情の検討を通じ、その医療診療活動にも触れた。王萌と張慧卿は戦時占領区域内における同仁会の衛生防疫活動についても検討した。以上の研究の中では、王萌の研究だけが同仁会による「大陸医学」の名義で日本占領区域内の流行病、開封地方地元の風土人情などの調査に一応触れた。以下の文献をご参照。飯島渉『マラリアと帝国——植民地医学と東アジアの広域秩序』、東京：東京大学出版会、2005年；福士由紀『近代上海と公衆衛生——防疫の都市社会史』、東京：御茶の水書房、2010年；丁蕾『日本近代医療団体同仁会』、『中華医史雑誌』2004年第2号；末永恵子「日中戦争期における対中国医療支援事業の変容——同仁会の医療支援について」、『宮城歴史科学研究』、2011年第68、69合併号；中西裕「延原謙と同仁会医療班中国派遣」、『学苑・文化創造学科紀要』、2012年第11号；王萌『抗戦時期日本在中国抗战时期日本在中国沦陷区内的衛生工作——以同仁会為对象的考察』、『近代史研究』、2016年第5号；張慧卿『“宣撫”抑或控制：大屠殺後日軍在南京的衛

- 生防疫》、《江海学刊》、2019年第3号等。
- 4 2022年6月には、中国石家荘市民張志斌氏によって太原臨時衛生調査班の関連史料が発掘蒐集された。そして、9月3日《太原晩報》という太原市地元の新聞社が“以太原为中心，深入调查周边居民的生活习性和生理特征侵华日军防疫部队调查报告被发现”（「新発見！太原を中心にその周辺住民の生活習性や生理特徴に関する旧日本軍防疫部隊調査報告が浮上」というテーマで報道され、それをきっかけに、学界や社会から注目されるようになった。ここでの「侵華日军防疫部隊原始日文調査報告」というのは、太原臨時衛生調査班によって実施されたものである。詳しくは2022年9月3日に日付の《太原晩報》の新聞記事をご参照。また、検討の便宜を図るため、以下は、張志斌氏による発見所蔵の“侵華日军防疫部隊原始日文調査報告は「張蔵報告」と略称する。
- 5 本稿では「北支」「支那」「満洲国」などは中国への蔑称であり、差別用語とタブー視されているが、検討の便宜を図るため、史料の記載のまま通りにする。
- 6 1939年11月には、第一軍軍医部編纂の「太原臨時衛生調査班業績集（山西地方ニ於ケル衛生対策参考資料）」をご参照。当業績集では、1938年1月から1939年11月まで太原臨時衛生調査班による調査報告や研究が収録されている。「太原臨時衛生調査班業績集（山西地方に於ける衛生対策参考資料）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C13120692500、衛生関係参考書類（1／3）昭和14～17年度（防衛省防衛研究所）。当班の調査活動では大きな役割を果たした当時太原臨時衛生調査班のメンバーである陸軍軍医中尉村上賢三は「業績集」のためわざわざ「序」を作成した。検討の便宜を図るため、以下は「太原臨時衛生調査班業績集」を「業績集」と略称する。
- 7 「業績集」の序文をご参照ください。
- 8 1938年4月、109師団軍医部部長吉野大佐の指示によって、日本金沢医科大学からの太原臨時衛生調査班員である嘱託の早稲田正澄がまた榆次へ行って、源渦鎮付近地表の白色物質について調査し分析してみた、そして調査報告としてその分析成績や調査結果を提出した。「業績集」の中の「七、特殊検査成績」をご参照。
- 9 「業績集」の序文をご参照ください。
- 10 2022年9月3日日付の《太原晩報》という太原市地元の新聞社の報道によると、太原臨時衛生調査班は「第三野戦防疫部太原分遣隊臨時衛生調査班」と同じものであり、「本当は同じ組織であり、違うのは落書きの詳細だけである」とした。しかし、「業績集」の「序文」の記載内容を見ると、《太原晩報》の記事の内容は事実と合わないところがある。
- 11 「業績集」の中の「二、食物及び飲料水ニ関スル調査研究」のところをご参照。
- 12 「業績集」の序文をご参照。注意してほしいのは「前第一軍軍医部部長三宅閣下」は太原臨時衛生調査班班長「三宅中佐」とは同じ苗字「三宅」であるが、実は同じ人物ではないことである。というのは1940年6月太原臨時衛生調査班の調査報告によると、当時班長三宅惣八郎の肩書は「陸軍軍医中佐」であることが分かった。1942年に第一軍軍医部部長に就任時の石井四郎の肩書は少将であることから、また、日本語辞書の解釈ですと「閣下」とは将官以上の軍人や天皇勅任官以上の文官であるとの記載も考慮にし、この二人は苗字が同じであるが、実は違う人であるというのが分かった。「閣下」の意味解釈として日本語デジタル大辞泉の記載をご参照。<https://www.weblio.jp/content/%E9%96%A3%E4%B8%8B>）
- 13 例えば、1940年9月から10月にかけて、太原臨時衛生調査班、軍医中尉の気賀沢杉人らが第一軍に山西省長治夏店鎮地方へ派遣され、洞窟兵舎の衛生的調査を実施した。1940年11月10日の井関部隊軍医部「洞窟兵舎使用上ノ注意事項」の中の「緒言」のところをご参照。「井医第735号 昭和15年11月12日「洞窟兵舎使用上の注意事項」送付の件通牒」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C13120666800、衛生関係参考書類（2／2）昭和14～17年度（防衛省防衛研究所）。
- 14 「業績集」の序文をご参照。
- 15 「業績集」の序文をご参照。
- 16 「業績集」の中における村上賢三、田辺源流、早稲田正澄と大島英男による「硬水軟化ニ関スル研究」をご参照。
- 17 「業績集」の序文をご参照。
- 18 「業績集」の序文をご参照。
- 19 「業績集」の序文をご参照。
- 20 「業績集」の序文をご参照。
- 21 「業績集」の序文をご参照。
- 22 「業績集」の村上賢三、木村義国、伊藤亮、古賀久治の「太谷、南関鎮、権店方面ニ於ケル水質調査報告」をご参照。
- 23 以下の史料をご参照。村上賢三、中島正三の「太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ間食ニ就テ」；三宅惣八郎、中島正三の「山西省ニ於ケル食品ノ研究（第三報）下級労働者ノ主ナル食品ニ就テ」、「山西省ニ於ケル食品ノ研究（第四報）現地販売鶏卵ノ新鮮度ニ就テ」、「井医第657号 昭和15年10月7日 参考書類送付の件通牒」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C13120666400、衛生関係参考書類（2／2）昭和14～17年度（防衛省防衛研究所）；「舞医第449号 昭和15年7月15日参考書類送付の件通牒」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C13120665800、衛生関係参考書類（2／2）昭和14～17年度（防衛省防衛研究所）。
- 24 以下の史料をご参照。1939年11月古賀久治の「硬度高キ水ノ常時飲用ノ人体ニ及ボス影響ニ就テ（附

- 犬馬牛ニ対シ) (山西省ノ水ト其ノ対策 其の1)」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C13120692700、衛生関係参考書類綴 (1/3) 昭和14～17年度 (防衛省防衛研究所) ; 「山西省西北部兵要気象及衛生地誌送付の件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C04122208400、陸支密大日記 第24号 1/3 昭和15年 (防衛省防衛研究所)。
- 25 「業績集」の序文をご参照。
- 26 「元北海道庁技師倉上政幹外六名特旨叙位ノ件／退職判事中西保則、元金沢医科大学教授村上賢三、元通信技師堀孝治」をご参照。JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A11114967700、叙位裁可書・昭和15年・叙位巻62 (国立公文書館)。
- 27 「業績集」の内容をご参照。
- 28 「業績集」の序文をご参照。
- 29 「業績集」の記載内容と日本国立公文館アジア歴史資料センター所蔵の資料によって整理されたものである。
- 30 「業績集」の序文をご参照。
- 31 「業績集」の序文をご参照。
- 32 「元北海道庁技師倉上政幹外六名特旨叙位ノ件／退職判事中西保則、元金沢医科大学教授村上賢三、元通信技師堀孝治」をご参照。JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. A11114967700、叙位裁可書・昭和15年・叙位巻62 (国立公文書館) ; 「満洲国哈爾賓医科大学教授要員トシテ日本現職管理割愛方ノ件」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C01003621500、昭和15年「陸支密大日記 第13冊」 (防衛省防衛研究所)。村上賢三は太原臨時衛生調査班の中核となるキーパーソンである。関連資料不足のため彼についての不明なところがまだ多いし、今後は更なる研究が必要であろう。
- 33 「業績集」の序文をご参照。
- 34 三宅惣八郎、中島正三の「山西省ニ於ケル食品ノ研究 (第三報) 下級労働者ノ主ナル食品ニ就テ」、「山西省ニ於ケル食品ノ研究 (第四報) 現地販売鶏卵ノ新鮮度ニ就テ」をご参照ください。「井医第657号 昭和15年10月7日 参考書類送付の件通牒」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C13120666400、衛生関係参考書類綴 (2/2) 昭和14～17年度 (防衛省防衛研究所)。
- 35 「井医第837号 1940年12月22日 潞安附近特殊家屋ニ於ケル衛生学的調査送付ノ件通牒 (1)」をご参照ください。JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C13120667200、衛生関係参考書類綴 (2/2) 昭和14～17年度 (防衛省防衛研究所)。
- 36 「業績集」の序文をご参照。
- 37 「張蔵報告」と対照して検討の便宜を図るため、以下は「太原臨時衛生調査班業績集」を「村上報告」と略称する。
- 38 「業績集」の序文をご参照。
- 39 具体的には、次のものが見られる。一、山西省公安局屠殺牛乳畜肉営業ニ関スル法規並ニ辦法。そのうち、6篇の法規や辦法が見られる。二、伝染病予防及ビー一般公共衛生ニ関スル法規及ビ辦法。そのうち、11篇の法規や辦法がある。三、山西省公安局薬剤師薬種商、麻薬及ビ製薬ニ関スル法規並ニ辦法。そのうち、7篇の法規や辦法が含まれる。四、山西省公安局旅館、飲食店、理髪店、浴場、娛樂場ニ関スル法規並ニ辦法。7篇の法規や辦法が見られる。五、山西省公安局医師、齒科医、助産婦ニ関スル法規並ニ辦法。そのうち、13篇の法規や辦法が見られる。六、山西省公安局妓女検診ニ関スル法規並ニ辦法。そのうち、1篇の法規や辦法が見られる。
- 40 村上報告の以下の研究をご参照。村上賢三の「山西地方ニ於ケル支那家屋ノ衛生学的考察 (其ノ二) : 室ノ床面積、室高、気積及ビ窓ノ大サニ就テ」 (1939年1月) ; 石崎有信の「支那家屋ノ換気ニ就テ」 (1938年8月) ; 村上賢三の「太原城外ノ支那兵営内空氣ノ理学的状態ニ就テ」 (1938年7月) ; 石崎有信の「炕ノ暖房力ニ就テ」 (1938年4月) ; 村上賢三と石崎有信の「北支ニ於ケル廁所改善ノ一方法」 (1939年3月)。
- 41 村上報告の囑託である伊藤亮の「山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査 (第二報)」 (1939年5月) をご参照。
- 42 村上報告の陸軍薬剤中尉橋本紋兵衛の「太原市井水ノ衛生学的調査成績」 (1938年8月) をご参照。
- 43 村上報告の村上賢三と田辺源流の「太原市ニ於ケル井水ノ硬度ニ就テ 特ニ一時硬度ト永久硬度並ニ硬度トクロールノ含量ニ就テ」 (1939年5月) をご参照。
- 44 村上報告の陸軍薬剤中尉橋本紋兵衛の「太原市井水ノ衛生学的調査成績」 (1938年8月) をご参照。
- 45 村上報告の以下の研究をご参照。村上賢三、田辺源流、早稲田正澄の「水ノ硬度測定方法ノ比較研究」 (1939年11月報告予定) ; 村上賢三などの「硬水軟化ニ関スル研究」 (1939年11月報告予定) ; 木村義国と伊藤亮の「軍管理山西第八工場試作濾水器ノ性能ニ就テ」 (1939年4月)。
- 46 村上報告の村上賢三などの「太原市住民ノ生体測定学的研究 (其ノ一) : 頭部、顔面ヲ除ク身体各部ニ関スル測定ニ就テ」 (1939年8月) ; 木村義国の「太原市住民ノ生体測定学的研究 (其ノ二) : 頭部及ビ顔面ノ諸測定ニ就テ」 (1939年10月) ; 木村義国の「山西人及ビ河北人ノ顔面ノ特徴ニ就テ (人類学的並ニ容貌学的觀察)」 (1938年11月) ; 石崎有信の「太原市住民ノ体力ニ就テ」 (1938年8月) ; 石崎有信の「太原市住民ノ指紋ニ就テ」 (1939年11月) ; 森部令次の「山西地方人ノ血液型調査」 (1938年5月)。
- 47 村上報告の石崎有信の「山西省人口統計ニ関スル二三ノ觀察」 (1938年2月) と「太原市住民ノ乳児死亡率ニ就テ」 (1938年11月) と「太原市住民の増殖力ニ就テ」 (1938年2月) をご参照。また、

- 田辺源流と石崎有信の「太原市居住婦人ノ初潮年齢ニ就テ」(1938年11月)をご参照。
- 48 村上報告の以下の研究をご参照。関口永と木村義国の「山西省ニ於ケル急性伝染病ニ就テ」(1938年4月)；関口永と藤野恒三郎と木村義国の「山西省太原住民ノ血清学的調査(其ノ一)：ウィダール反應、ワイルフェリックス反應、黴毒反應ニ就テ」(1939年1月)；田辺源流の「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的觀察(第一報)」(1938年5月)と「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的觀察(第二報)」(1938年7月)；木村義国の「山西地方住民ノ耳鼻咽喉科疾患ノ統計的觀察」(1938年8月)。
- 49 村上報告の塚本起夫の「山西省産漢薬調査」(1939年2月)をご参照。
- 50 村上報告の村上賢三などの「太谷、南関鎮、権店方面ニ於ケル水質調査報告【附】同方面ニ於ケル兵要衛生地誌(給水状況)」(1939年6月)。飲料水のほか、作戦に直接関連する喫緊の課題の対策として、早稲田正澄も加入し、109師団軍医部部長吉野の指示に基づき、太原臨時衛生調査班は山西省榆次へ行って、源渦鎮付近地表の白色物質について調査し分析してみた。そして調査報告としてその分析成績や調査結果を提出した。早稲田正澄の「源渦鎮付近地表ノ白色物質分析成績」(1939年4月)をご参照。1940年11月には、第一軍に派遣され、山西省長治夏店鎮地方へ派遣され、洞窟兵舎の衛生的調査を実施した。「舞医第449号 昭和15年7月15日参考書類送付の件通牒」をご参照。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120665800、衛生関係参考書類綴(2/2) 昭和14～17年度(防衛省防衛研究所)。
- 51 2022年9月3日付の《太原晩報》の新聞記事によると、張蔵報告は「11冊」と報道されたが、実は「13冊」ある。その違いについて、資料の対照を通じ、「太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ栄養価ニ就テ(其ノ一)」と「太原市ニ於ケル支那人ノ食物ノ種類ト其ノ栄養価ニ就テ(其ノ二)」を、「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的觀察(第一報)」と「太原地方住民ノ口腔及び歯牙ノ衛生学的觀察(第二報)」を、それぞれ「一冊」と見て計算されたのが分かった。調査内容も報告の作成時間も違うため、本稿では「張蔵報告」13冊の説にする。
- 52 張蔵報告の石崎有信の「太原市住民の増殖力ニ就テ」(1938年2月)をご参照。
- 53 張蔵報告の伊藤亮の「山西地方ニ産出スル食品ノ栄養学的調査(第一報「米」)」(1939年3月)をご参照。
- 54 張蔵報告の村上賢三などの「硬水軟化研究」(1940年1月)をご参照。
- 55 三宅惣八郎と中島正三の「山西省ニ於ケル食品ノ研究(第三報) 下級労働者ノ主ナル食品ニ就テ」の「参考文献」のところをご参照。「井医第657号 昭和15年10月7日 参考書類送付の件通牒」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120666400、衛生関係参考書類綴(2/2) 昭和14～17年度(防衛省防衛研究所)。

- 56 三宅惣八郎と中島正三の「山西省ニ於ケル食品ノ研究(第三報) 下級労働者ノ主ナル食品ニ就テ」と「山西省ニ於ケル食品ノ研究(第四報) 現地販売鶏卵ノ新鮮度ニ就テ」をご参照。「井医第657号 昭和15年10月7日 参考書類送付の件通牒」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120666400、衛生関係参考書類綴(2/2) 昭和14～17年度(防衛省防衛研究所)；「舞医第449号 昭和15年7月15日 参考書類送付の件通牒」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120665800、衛生関係参考書類綴(2/2) 昭和14～17年度(防衛省防衛研究所)。陸軍軍医中尉賀賀沢杉人の「潞安附近特種家屋ニ於ケル衛生学的調査」と「洞窟兵舎使用ノ注意事項」(1940年11月)をご参照。「舞医第449号 昭和15年7月15日 参考書類送付の件通牒」をご参照。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C13120665800、衛生関係参考書類綴(2/2) 昭和14～17年度(防衛省防衛研究所)。
- 57 衛生防疫や医療事業のほか、同仁会は日本軍占領地域における流行病や地元の風土人情についても調査を実施した。同仁会開封診療防疫班は開封地元住民の主食である小麦、コウリヤン、粟の栄養価について調査を実施した。岡田甚七の「華北邦人の常食について」、《同仁会医学雑誌》(1942年第3号)をご参照。同仁会の調査と比し、太原臨時衛生調査班の調査内容は豊かであり、より多種多様であるというのは明らかであろう。

参考文献

- 飯島渉(2005)、『マラリアと帝国——植民地医学と東アジアの広域秩序』、東京大学出版会。
- 小島晋治、大里浩秋、並木頼寿(2001)、『20世紀の中国研究』、研文出版。
- 岡田甚七(1942)、「華北邦人の常食について」、《同仁会医学雑誌》、1942年第3号。
- 辛島理人(2015)、『帝国日本のアジア研究総力 戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』、明石書店。
- 末永恵子(2011)、「日中戦争期における対中国

医療支援事業の変容——同仁会の医療支援について」、『宮城歴史科学研究』、2011 年第 68、69 合併号。

中西裕（2012）、「延原謙と同仁会医療班中国派遣」、『学苑・文化創造学科紀要』、2012 年第 11 号。

原覚天（1984）、『現代アジア研究成立史論—満鉄調査部・東亜研究所・IPR の研究』、勁草書房。

福田由紀（2010）、『近代上海と公衆衛生——防疫の都市社会史』、御茶の水書房。

三好章（2018）、『アジアを見る眼 東亜同文書院の中国研究』、あるむ。

丁蕾（2004）、『日本近代医療団体同仁会』、『中華医史雑誌』2004 年第 2 号。

王萌（2016）、『抗戦時期日本在中国抗战时期日本在中国沦陷区内的衛生工作—以同仁会為対象的考察』、『近代史研究』、2016 年第 5 号。

張慧卿（2019）、『“宣撫”抑或控制：大屠殺後日軍在南京的衛生防疫』、『江海学刊』、2019 年第 3 号。

